

人生の知恵. XIV

ロマン・ロランの言葉



《訳編者紹介》

山口三夫（やまぐち みつお）

1928年、奈良県に生まれる。東京大学
文学部卒業。元静岡大学仏文学教授。

著書、『歴史のなかのロマン・ロラン』
『ロマン・ロランの生涯』『人間をみつ
めよう』『ロマン・ロランとともに』

訳書、ロラン『ミケランジェロ』『ベ
ートヴェンの生涯』『ジャン・クリ
ストフ』他。

©1997

人生の知恵 14

ロマン・ロランの言葉（新装版）

平成9年9月30日 初版印刷

平成9年10月10日 初版発行

訳 編 者 山 口 三 夫

発 行 者 津 曲 篤 子

印 刷 者 杉 山 英 樹

株 式 会 社
発 行 所 彌 生 書 房

162 東京都新宿区中町18番地

電話・東京(3260)3707(代表)

振替口座 00140-8-97315番

定価はカバーに表示してあります

落丁・乱丁本はお取替え致します

浩文社印刷・小実製本

ISBN4-8415-0743-4 C0312

人生の知恵

ロマン・ロランの言葉



鹽生書房

装幀・装画 望月通陽

ロマン・ロランの言葉
目次

生のいぶき

自己の所有……………	一〇
かくされた力……………	一五
生命の泉……………	一七
真理と現実……………	二二
独立心と誠実……………	二七
意欲する……………	三二

人生のたたかい

前進すること……………	三六
苦しみと歓び……………	四三
生きる……………	四七

精神の自由	三
偽善と誤り	七
善悪・道徳・人間	六

愛の世界

友 情	三
恋ごころ	七
結婚について	八
母と子	九
女性のなぞ	三
愛の波紋	一〇〇

抵抗のエネルギー

反対する一人……………一〇六

国家について……………一二一

被圧迫者……………一二六

エリートと民衆……………一二九

思想の不毛……………一三六

戦争と革命

戦争について……………一四四

平和か……………一五九

理想化する……………一四三

暴力と非暴力……………一四七

革命のなかで……………	一五三
-------------	-----

美と信の世界

芸術について……………	一五九
創造する魂……………	一六三
音　　楽……………	一六八
信　　じる……………	一七五
永遠なるもの……………	一七九
運命の前進……………	一八四

解　　説……………	一九二
-----------	-----

ロマン・ロラン年譜……………	二〇八
----------------	-----

本書の引用出典中、出版権のあるものについては、版權所有者「みすず書房」の御好意により収録させていただきました。

生
の
い
ぶ
き

自己の所有

自己を所有するための青年たちの壮大な努力、他人にうちかつて生きるといふ單純な權利を獲得するため、自分の人種のもろもろの魔神にうちかつて自己を獲得するための熱烈な戦い……

(ジャンリクリストフ「新しい日」)

†

大部分の人間は二十歳で死んでしまふ。この期限がすぎると、かれらはもう自分自身の反映にすぎなくなり、のこりの生涯は、自分自身をサルまねし、かれらが真に生きていた時代に自分が言ったり、したり、考えたり、愛したりしたことを、日ごとますます機械的にくり返すことで流れ去っていく。

(ジャンリクリストフ「青年」)

†

このちっちゃなディオゲネス「古代ギリシアの哲人」は人間である人間、生活のあらゆる瞬間に自己自身であつて反響^{エコー}ではない人間を、さがしもとめていた。

(魅せられた魂「母と子」)

†

たくさんの義務があるが、すべてのうち第一のものは、犠牲や自己投与においてまで自己であること、ずっと自己でありつづけることだ。

(クレランボー)

†

——やつらはやりたいようにぼくのことを言ったり、書いたり、考えたりはできるが、ぼくがぼく自身になるじやまはできないよ。

(ジャンリクリストフ「反抗」)

†

いかなる信仰か？ 自己への信仰だ。うぬぼれか？ そうではない。この説明しがたいもの、かの女のなかにあり、かの女がけがさず息子につたえたいと思っている、この聖なるものへの信仰だ。

(魅せられた魂「夏」)

†

かれらは植物が太陽をあこがれるように神を熱望している。瀕死の人間は生命にしがみつく。けれども自分のなかに太陽と生命をもちこんでいるものは、どうしてそれらを自分の外にさがしに行くことがあるう？

(ジャンリクリストフ「青年」)

†

どうして隣人に似るため、あるいは隣人をいたわるために、自分が考えているのとは別なふうに考えるまでになるのか？ それはだれにも利益にならずに自分自身を破壊することだ。第一の義務は自分があるがままのものになることだ。これはよい、あれは悪い、とあえて言うことだ。弱い人たちのように弱くなることよりも、強いということによっていつそ多く、弱い人たちによいことをする。ひとたび犯された弱さのためにつくそうと欲するなら、寛容でありたまえ。けれども犯されようとするいかなる弱さもけつしてごまかすな。

(ジャン・クリストフ「新しい日」)

†

人生において評価——自分の評価——を失うよりは、評価されないほうがアネットには耐えられ
たろう。それはエネルギーの源泉だからだ。

(魅せられた魂「夏」)

†

——一言でいえば、自分の精神生活に固有の法則を成就して、いちばん親しい人でも、だれか他人の法則に自分の法則を犠牲にしないこと……

(魅せられた魂「アネットとシルヴィ」)

†

どんな権利で百人、千人、一人でも四千万人でもいいのだが、かれらは、わたしが自分の魂を否認することを要求するのか？ 四千万の魂はあまりにしばしば、四千万回みずからを否認した一つ

の魂にしかないものだ。

(クレランボー)

†

かれはすでに父親が読んでいた同じ新聞をとっている。新聞はなん度も意見を変えた。けれども、かれは変わらなかった、かれはいつも新聞と同じ意見なのだ。好奇心はほとんどない。機械的な生活……

(魅せられた魂「母と子」)

†

人は他人に道を示すこととできない。かれらの代わりに道をつくってやることはできぬ。各自みずから自分を救わねばならない。

(ジャンリクリストフ「女友だち」)

†

さあ、ふるえるな、きみは運命を支配してはいないが、きみもまた運命だ、きみは運命の声の一つだ。だから語れ、それがきみの法則だ。きみの思想を言え、だがそれをやさしさこめて言うがいい、自分の子どもを大人にすることはできないが、かれらがのぞむなら、忍耐よくかれらに大人になることを教えるやさしい母親のようであれ。……かれらに例を示して、言うがいい——「これが道だ。……おわかりだろうが、人は自分を自由にすることができのだよ」と。

(クレランボー)

†

各自が自分の道をたどるがいいのだ！　もしかが神を認識したいと熱烈に望むなら、安らかにしていても、かれはそれを実現するだろう。

(魅せられた魂「夏」)

†

めいめいが順番に世界の経験をやりなおさねばならない。

(ジャンリクリストフ「広場の市」)

†

——きみたちは弱虫にちがいないよ、とクリストフは言った、自分がこわいんだからな。なんだって！　きみたちには秩序が必要だと言いながら、それをきみたち自身でつくれないうのかね？　きみたちは曾祖母^{ひばあ}さんのスカートにしがみつきに行かなくちゃならないんだな！　まったく！　さあ、ひとりつきりで歩いてみたまえ！

——根をはらねばならぬ、ですネ、とジョルジュは、当時の俗謡の一つをまったく得意げにくり返した。

——根をはるためにはだね、木はみな鉢に植える必要があるのかね？　土地がそこにあるよ、みんなのために。きみの根をこの大地にさしこみたまえ。きみの法則をみつけたまえ。きみのなかに探すことだよ。

(ジャンリクリストフ「新しい日」)

かくされた力

だれひとり、確実に自己の主人であるものはいない。夜警をしていなければならぬ。というのも、もし眠っていれば、力はわれわれのうちへおしよせ、われわれを運び去るからだ……いかなる深淵に？……

(ジャンクリストフ「燃えるいばら」)

†

各人めいめい自分のなかに二十人の違つた人間をもっているのだ、笑うやつ、泣くやつ、切株みたいに雨にも天気にも無関心なやつ、狼、犬、羊、善い子、ろくでなしというわけだが、二十人のうちの一人がいちばん強く、これが言葉を独りじめして、ほかの十九人に口ばしをつぐませているのだ。

(コラ・ブルーニョン)

†

しかしたぶんわれわれの内には、精神や心情とはべつの力、感覚さえもちがう力……他の力が眠りこんでいる虚無の瞬間に、支配権をにぎる不思議な諸力が、存在しているのである。

(ジャンクリストフ「夜明け」)